# 他者に対する抵抗の形式
# Architecture / The form of resistance to the Other

竹山聖
Kiyoshi Sey Takeyama

## A．場の中の思考
## Thinking in a place

*場所はそこを占める対象に論理的に先立つ。*
*スラヴォイ・ジジェク*[1]
*主体とはまさしく、空白の場所に従う審級なのである。*
*ジル・ドゥルーズ*[2]

[1] スラヴォイ・ジジェク『イデオロギーの崇高な対象』p．293。

[2] ジル・ドゥルーズ「構造主義はなぜそう呼ばれるのか」『二十世紀の哲学』フランソワ・シャトレ編、中村雄二郎監訳、白水社、1998(1973)、p．365。

### 1．不均質な場を読む／他者と出会う
### Reading the heterogeneous environment / Meeting the Other

生命体は、場におかれるというより、場を生成する存在である。もともとは場の状況から発生した生命が、場の状況に作用し、場を変容させる力をもつようになった。生命活動とは環境の中に歪みをもたらすことであり、相互に干渉しつつ新たな環境を形成する働きである。
生物が環境の中で生み出され、自らの場――生態学的なニッチ――を持つようになり、植物が自らの場を拡張するよう環境にはたらきかけるようになり、動物が環境の中に自身の場を作り出して活動の可能性を広げると同時に自身の安全を図るようになった。生命体は環境の中に自らの場を求め、働きかける存在である。
人間もまた、新しい環境の中に自らの場を求めつつ、移動を繰り返した。環境との応答を繰り返しつつ、やがて自覚的に建築という行為をはじめる。
その出発点は、意識するしないにかかわらず、「場を読む」ことである。自らの置かれた場、安全を確保する場、そしてその可能性を展開する場。場とは他者との関係であって、場に呼び出される可能的要因の中から、人間は選ぶべき、戦うべき、避けるべき他者を同定し、関係を取り結ぶ。
ところでわれわれが生活を営む地球の表層は決して均質な空間ではない。あらかじめ地形があり、気候があり、生態系が形成されている、不均質な空間である。したがって他者は多彩なリズムと不均質な強度に満ちている。しかも自然の不均質ばかりではない。さらに人為的な不均質が重ね合わされるのである。すなわち政治的、経済的、制度的、社会的な歪みが導入される。実現しえぬ幻想のなかにユートピア[3]が生まれ、現実社会の中には「すべての他者たちに関係しつつも、他者たちが互いに意味づけられ、映し出され、あるいは鏡像化された関係の組み立てを宙吊りにしたり、中性化したり、転倒したりしようとする」空間的な配列としてのヘテロトピアが実現されてきた[4]。さまざまの社会に応じて因習により成立した禁忌／アジールがあり、死者の場としての墓があり、異界としての庭が構想され、異質の価値の交換、祝祭の場として市が立ち、境界を引く国家によって法の網がかかり、境界を破る交通によって流れが引き起こされている。
人間はそうした差異に意味づけられて住まう。不均質に意味づけられて住まう。むしろ不均質こそが意味である。意味の始原である。均質で滑らかな場には意識の引っかかりがなく、意味の生成をもたらさない。環境を加工し、意図的に不均質化することをとおして、人間は自らの幻想を現実に仮構し、仮託する空間をえてきたのである。
多くの集落が、そして都市が、地形的な特異点を選んで立地しているのも偶然ではない。海と陸の境界、山と平地の境界、砂漠と緑地の境界、川の合流点、屈曲点、入り江、窪地、谷、尾根筋、等々。自然の境界、差異と移動経路の結節点は多くの場合、一致する。人間は場が変容する地点、異質の場の接する地点、双方の作用を受けつつ逃れることも可能な際、ぎりぎりの場所、そのような場所に拠点を築いてきた。場所の力を増幅して居住の拠点を定めてきた。差異を有する環境こそが活動を活性化するからである。多様な、そして強度を持つ他者が生命体を鍛える。
生命体の活動は環境に歪みをもたらす。環境に決定され、かつ環境を意味づける。とするなら、移動が可能になった生命体にとっては、あらかじめ自らにふさわしい歪みを持った環境を選ぶことが、活動の方向性を明らかにする。結果的に進化の方向性を決定づける。生命体は、場から意

[3] ユートピアは良くも悪くも人類を導いてきた。文字通り「どこにもない場所」であるだけに、それが善意の反動とならぬ根拠はどこにもない。辛辣な言辞で知られる知識人であり無国籍者、シオランの言葉を引くなら、「正真正銘のユートピアを抱懐し、確信をもって理想社会の画像を描いてみせるには、ある種の無邪気さが、極言すれば頭の悪さが必要とされる」のである。：E.M.シオラン『歴史とユートピア』出口裕弘訳、紀伊国屋書店、1967(1960)、p．130。

[4] ミシェル・フーコーがこれらを人類史の中で歴史的に展開されて来たさまざまな「他者の場所―ヘテロトピア」として活写している。Michel Foucault: Of Other Spaces: Utopias and Heterotopias, Lotus, 48/9,1985/6, pp.9-17. (from Rethinking Architecture, pp.350-356)

味を与えられ、また場に意味を与える。意味とは生きるための情報である。場を読むことは、生命体の活動のはじまりであり、生き延びるための知だ。それは場に歪みをもたらす自らの生の営みと場の歪みとを同調させることに等しい。

建築という行為もまた、基本的には場に歪みを生み出すことにはじまり、そこに帰着する。新たな場を形成するという点ではクリエーションと呼んでもよいが、環境との応答という観点から言うなら、それはクリエーションというより、改変であり、変形である。建築は場との応答を形象化する行為である。建築はつねに他者との関係の只中に置かれている。建築は、むしろ他者との関係の調整と確定の行為と捉えるべきである。

もともと不均質な場に置かれ、不均質を再編成する。これが建築という行為である。建築は差異を生み出す。生命体を活性化すべく差異を生み出すのであって、あるいは差異を調整し、増幅する行為である。古来そうであったし、これからもそうあり続けることだろう。

そのひとつの選択肢として、ミクロ的に均質な場を作るというアイディアがありうる。具体的な例が近代建築の到達した「均質空間」[5]である。とはいえそれも、局所的な均質を生み出すにとどまる。大局の不均質の中の、部分的な均質である。むしろ理想状態を標榜する擬似的な均質を生み出し、操作可能な空間モデルをささやかに実現した、といっていい。ただこれが理念としてあまねく世界中に広まったのが今日の社会である。

現実には「均質空間」は局所的均質に留まり、むしろ大いなる他者、すなわち不均質に取り囲まれてある。地球上で建築を行う限り、この現実からは逃れられない。

「均質空間」は、むしろ多くの条件を括弧に入れて、空間を抽象化するところから生まれる理念である。ただ日常の人間活動レベルにおいては、近似的な実体化が可能だ。人間活動のスケールと、地球環境のスケールのディメンションが著しく異なるからである。ただし近似にとどまる。そして人間の身体自体は方向性の点からも、距離感覚の点からも、著しい不均質空間を自身の周囲に展開するから、決して操作可能な点には還元できない。均質な点に抽象されるべき個体が著しい偏差を持つことが、均質空間モデルのジレンマである。超越的視点では見過ごしうる誤差でも、内在的視点からは大きな偏差となる。

ことによると、宇宙空間では理念と現実の一致が見られるかもしれない。局所と極大のディメンションが、比較不能なほどに異なり、また重力や大気や水といった不均質の要因が希薄となるからである。しかし宇宙空間でも風邪をひくし歯痛に悩まされもするだろう。身体の不均質は克服されない。

ともあれ、地球上の建築を問題にする限り、われわれは不均質な空間を前提とせざるをえず、またわれわれ自身が生命力維持と活性化のため、不均質な場に身を置かねばならない。生命体は流れを維持しなければならない。傾きを内蔵する生命体でなければならない。リズムをもつ生命体でなければならない。われわれ自身が不均質な存在だからである。そして差異が、不均質な場のみが、生の欲動／エロスを惹き起こすことができるからである。

建築の課題は、環境に渦巻く不均質に、秩序ある流れを与えることである。あえてクリエーションという言葉を使うなら、建築的クリエーションは、環境の改変と変形の中にあって、意味ある流れを形成するというところにある。場を読み、不均質な環境を意味づけ、方向づけ、階層づけることを通して、それまで環境においては成立していなかった新しい空間の質を生み出すこと。これが建築という行為である。

地形的、気候的、生態系的にあらかじめ意味づけられた環境のなかに、新たな価値を生成する。この行為は環境的な与件を離れてありえない。むしろ与件のなかから、選び取り、消去し、増幅しつつ発見的な空間を生み出すという手続きがとられる。まずは周囲の状況を読む。コンテクストを読み、しかるべき他者と出会う。これが建築の出発点である。

ここで注意しておかねばならないことは、読み込む主体に応じて、出発点が異なるという点である。重ねて確認しておこう。建築に一般解はない。可能なのは特殊解のみである。むろん、時代の要求や技術の進歩によって、特殊解の分布に傾向が見られる。これを様式という言葉で言い表すことも可能だろう。時代は時代の意志と様式をもつ。しかし個々の建築に注目するなら、これはあくまでも特殊解である。このことが建築の多様を保証している。そして多様こそが生命のサバ

[5]「均質空間」という概念は、原広司によって精緻に展開されており、筆者もそこから多くの思考の手がかりをえているが、ここでは即物的に、均質な箱というごく単純化された意味で用いている。原広司はさまざまな場所でこの思想を素描しているが、代表的なものとして、文字通り「均質空間論」(『思想』岩波書店1976.8/9初出、『空間＜機能から様相へ＞』岩波書店、1987所収)を挙げておく。結びの「自由は均質空間を理念とする現実の空間の中では、獲得不可能」なる命題は、本論考における＜自由への壁＞の問題意識と強く響き合っている。

イバルの鍵であるように、人間という生命体を活気づける建築の存在形態のありうべき姿でもある。
建築の多様は、設計主体すなわち切断の場の個別性にその理由を求めることができる。建築は設計主体によって解答が異なる。ただしそれは設計主体の美意識の差異というよりも、むしろ出発点である与件読み取りおよび順位づけに差異があるからである。与件を読み取る能力は設計主体の能力のもっとも大きな部分を占めている。読み取られた与件のなかにこそ、そして選別された要因のなかにこそ、発見的な空間のヒントは埋蔵されている。
地形に対する、気候に対する、環境に対する感受性は各々異なっている。だから場所と主体に応じて建築は変容する。にもかかわらず、最大多数に共有される価値を実現することと、突出した価値を実現することが、同時代のある緊張関係のなかで共存する。不均質な環境のなかで、不均質な生命体の集合のために求められる空間は、普遍的であると同時に多様であることが求められるはずだ。正確に言うなら、ある特殊解が、時代の価値において普遍的であると同時に、場所に応じて多様である可能性をもつことが求められる。
この多様な可能性に向かう試みが人類の歴史を切り開いてきたのであり、多くは特異点に棲息する個人の営みが突如多数を巻き込んでうねりとなり、新しい流れを生む、という経過を辿ってきた。古来、発見的な空間の多くは個人の想像力の所産であり、それがやがて共同体に分けもたれたという経緯をもつ。工夫・考案は遊びから発したものであり、遊びがそもそも個人のものだからである。
普遍的な美と多様な可能性を表現しえた個々人の営みが、遊びが、さまざまな切断の場が、瞬間の移行が、そのときどきの現在に渦を引き起こし、時代の流れを形成していく。そして普遍的な美は、いつも決まって事後的に見出されるのである。
生命の可能性は流れのエッジに産み落とされる。多くの場合、新しい技術がその引き鉄となるが、これに形が与えられねばならない。生命体は形に反応するからである。新しい形、とりもなおさずそれが発見的な空間を導くのだが、この未来のありうべき関係性を表現しえた形が、次の時代を担っていく。
他者／コンテクスト／場所に規定される想像力について述べてきた。しかし他者／コンテクスト／場所との関係を読み取るばかりでは、実は決して形に至らない。つまり事物の配列を決定することができない。要素間の関係、つまりデザインを導くためには、大きな亀裂を跨ぎ越す必要がある。そこに個人の想像力が関与する。他者／コンテクスト／場所の作用を受けて感応する個体、そこにエロスの生成を見極め、発動するエロスに新たなコンフィギュレーションを与えるという作業がなされねばならない。そのために、のちに論じられるであろう＜建築的瞬間＞の訪れが必要なのである。しかし急ぐまい。まだ建築の出発点を確認したばかりである。

## ２．受動的な場から能動的な場へ／可能性の地平へ
From passivity to activity in contextual relationships / The horizon of possibility

生命体はおかれた場を自ら構造づけて、自身にふさわしい環境を形成していく。いやむしろ環境に触発されて生成した生命体が場を形成していく。生命体と場とは相互形成的である。
建築と場もまた、一体である。建築もおかれた場を自ら構造づけ、環境と応答を繰り返していく。設計は、建築の立ち上がる前に、建築の全寿命を圧縮して、環境との応答をシミュレートする行為である。建築と環境とは相互形成的であり、相互に応答を繰り返しつつ寿命を全うしていく。
建築は他者／コンテクスト／場所に導かれて、自らの存在形式を決定づけられていくが、建築の存在形式は同時に、他者／コンテクスト／場所に改変をもたらす。建築は、つまり、新たな他者／コンテクスト／場所を形成する行為である。
発見的な空間とは、それまでの他者／コンテクスト／場所のなかで見過ごされがちであった価値を、決定的に救い上げて主題化することから生み出される空間である。場の流れの中から、意味ある主題を抽出し、磨き上げる。可能性を引き出し、空間化する。
人間は物を象徴のレベルで捉えるから、ただ物は物であるのでなく、物を超え出して、意味の乱舞の世界に参入する。連想を生み出し、記憶をよみがえらせ、感触を伝える。やがて世界を形成

すらする。言うまでもなく、世界は象徴のレベルに出現する。
今までの環境に手を加える。すると新しい謎が生み出される。謎の連鎖に規則性が見出されもする。経験と記憶が作業を導くだろう。謎やきっかけや手がかりは増殖し、絡み合って、新たな世界を築いていく。そこに立ち現れる世界を、人類は遊んできた。立ち現れ方を楽しんできた。
一枚の壁を立て、一画に屋根を架ける。そこに差異が生まれる。壁が、屋根が、防御や遮断や日よけや雨宿りという当初の目的を超えて、光の戯れや風の道や天体運行の観測や音の伝達や意識の誘導や諸々の想像力を開く契機となっていく。装飾もまたそこから生み出されたことだろう。人類は新たな意味を紡ぐ楽しみを覚えたはずだ。
なぜならそこから無限の解が生み出されていくからだ。無限であることの可能性は、人間の意識を解放する。仮に一枚の壁とひとつの屋根という組み合わせだけでも、壁の高さ、長さ、厚さ、屋根の形、素材、大きさなどを変化させていけば、その組み合わせたるや無限である。壁＋屋根が単なる足し算にならない。部分空間の切り取り方は無限である。それが空間の性質だ。全体と部分が呼応する。全体が部分に送り込まれ、部分が全体に反応する。空間は要素に還元しえない。関係そのものだ。無限の意味が紡ぎだされるのも、要素の組み合わせが空間という関係性を生んでしまうからである。
壁と屋根だけで無限の可能性が広がる。ましてや他の要素が加わり、またそれぞれに加工が施されたりすると、解答はまさに無限である。考える人間ごとに解答がある。高い、低い、広い、狭い、明るい、暗い・・・、個人はそこに自身の空間イメージ、すなわち意図を込めることができる。意図は関係の総体の中に浮かび上がる。決してそれぞれの要素の固有性に還元することもできず、また統計的な平均をとることもできない。多様多彩な空間の可能性が開かれている。たとえ限られた部材からでも無限の可能性を生むことができる。未来は予測を超える。あるいは予測を拒む。決定論が通じない。そこに創造性も宿る。つまり自由が実感できる。未来を自らの手で開くことができる。建築を構想する醍醐味はここにある。自然から自由へ。成る、生むからつくるへ。
与えられた世界に同調する工夫、他者の訪れに呼応する受動的な場を工夫するところから、これを加工して新たな世界を切り開き、能動的な場を形成して、新たな他者の関係を生み出し、自らの想像力の可能性の地平に遊ぶこと。これが人類の見出した最大の娯楽たる、建築という行為の始まりであり、驚きの契機である。

## 3．replacement の可能性／他者の位相
## The possibility of replacement / The phase of the Other

*差異の力が発散と脱中心化である限りにおいて、反復の力は置き換えと偽装である。*
*ジル・ドゥルーズ*[6]

ジャック・デリダは、「Place is nothing other than the possibility, chance, or threat of replacement. 場所とは、置換(到来)の可能性、期待あるいは脅威に他ならない」と述べている[7]。replace とは、新しくものが、他者が、その場所に到来するという含意がある。取り去る場合、deplace という。
つまり、場所とは可能性であり、なにものかの到来を待ちうける場である、とデリダは語る。なにものかとは善きものか悪しきものだ。役に立つものか危険なものだ。すなわち価値だ。それらが期待の位相か脅威の位相に到来する。
建築という人間の営みは場所を作り出す。環境から到来しあるいは引き出されたファクターを強調し、フィルターをかけ、あるいは相殺し、改変し、変形しながら、新しい行為の可能性を生成する場を生み出す。
建築は主体の住み処であり、場所は他者の住み処である。ただしこれらは「相補的」な関係にあり、形のかみ合う関係、鍵と鍵穴の関係となり、作用と反作用を及ぼし合い、融合し、新しい出来事を生成する。建築行為の主体にとっては、建築は図であり、場所は地であり余白である。視点の移動によって認識される形は反転する。

[6] ジル・ドゥルーズ『差異と反復』財津理訳、河出書房新社、1992(1968)、p．428。

[7] Anywhere, Rizzoli, 1992, p．24。日本語版は『Anywhere』NTT出版、1994、p．19。ただし訳文は文脈に応じて訳しなおしてある。

建築は否応なく場所に自らを引き渡し、他者を導き入れる。しかしながら、建築なくして建築的場所の形成もない。たとえば、一枚の壁が、環境に新たな可能性の場所を挿入する。
場所はまた、建築を待ちうけてもいる。一枚の紙は、一本の線が描かれるのを待ちうけている。余白と線の絡み合いが、一枚のスケッチを生む。建築は、このとき、潜在的、可能的な世界展開の契機であるといっていい。潜在的とは、心の置換可能性をさし、可能的とは物の置換可能性をさしている。建築はありうべき、あるかもしれない、あるであろう世界を、提示する。心の審級においてこれを潜在的といい、物の審級においてこれを可能的という[8]。
場所を開いていくこと、これが建築という行為の実質である。場所は、意味をたたえている。建築は意味を現実の世界に到来させる。潜在的なものは顕在的なものとなり、可能的なものは現実的なものとなる。
場所のコンテクストを読み取り、その潜在性、可能性を引き出すために、建築はなされる。それは場所に内在していた他者の位相を際立たせることであり、デリダの言うreplacementとはこの「他者の位相」の潜在性、可能性を到来させることに他ならない。
そしてそれは誘惑に身をさらすことでもある。たとえばデリダはこう語っている[9]。

*誘惑しようと意志するさまざまな仕方しかないのです。いま話題になっているエクリチュールから性的なものを奪い去り、あらゆる欲望の、あらゆる誘惑の痕跡をそこから抹消するところまでいけるなどとは、私は考えません。私が書くのは誘惑するためです。*

私が設計するのは誘惑するためです、と語りたい誘惑にかられる。性的なものは他者の位相にある。他者の位相を到来させるために私は設計する、と言い換えてもいい。誘惑の論理は複雑であって逆説的でもあり、致命的でもあるとデリダは述べた後、このように続ける。

*誘惑するとは、まず第一に、道から逸らせる、という意味であり、つまり、連れて行く・・・といっても悪の道へでなく、他の道へ連れて行くということです。だから脱構築も散種も誘惑なのです。それは道を踏み外させる仕方です。*

多様な分岐を待ちなにものかの訪れを待つ場所。それは、なにものかの訪れを誘う場所となる。誘われ、誘いつつ、書くという行為はなされ、建築という場所の構想はなされる。
他の道へと逸れる誘惑。それは建築という行為の渦中につねにそのささやきを聞く声である。他の可能性をいつも意識しつつ、なお唯一の決定を下さねばならない。ただそこはつねに他者の到来を待ち望む場所、可能性にむけて開かれた場所であって、比喩的に言うなら、replacementを待つゼロ[10]の場所である。潜在的、可能的な場所に顕在的、現実的な形を与えること。誘惑を宿し他の世界への通路となること。そこに建築の魔術がある。
潜在的なものと可能的なもの、場所がそれを暗示し、建築がそれを明示する。建築は、場のなかの思考である。そして場は、流れのなかにある。あるいは流れそのものだ。建築という行為は場の流れを切断し、あるいは接続して、新たな関係を築く行為である。相互形成的に総体として生み出された流れを空間という。将来的な時間の流れをも込めて、あえて生み出されたと記しておく。建築は置換して到来する他のものたち、新たなものたちを欲望し、そのための場所を開いてゆく行為だ。誘惑のエロスの場だ。蜜が流れ、ミルクの湧き出る場所だ。それは憧れと畏れに満ちている。

## B．環境との応答
Response to the environment

*思想が抵抗しながらも縛りつけられているものを超え出るところにこそ、思想の自由があるのだ。*
*テオドール・アドルノ*[11]
*一方の極において母なる日常の方言を用いることが、他方の極においては父なる共通語の毅然たる法則を守ることが指定されている。*
*ジル・ドゥルーズ*[12]

[8] ジル・ドゥルーズは潜在的(virtual)なものと可能的(possible)なものを区別し、前者は現実的(アクチュエル、英語でactual／本稿ではこれを現勢的、顕在的と呼ぶ)なものと、後者は実在的(レエル、英語でreal／本稿ではこれを現実的と呼ぶ)なものとの対立としてとらえている。たとえば図を描きつつ思考し創造するのが＜virtual→actual>であり、差異に満ちたココロのレベルにおける空間加工、図面をもとに建設するのが＜possible→real＞であり、同一性に支えられるモノのレベルにおける空間加工、ということになる。：ジル・ドゥルーズ『差異と反復』財津理訳、河出書房新社、1992(1968)、pp．318-319。

[9] デリダ『他者の言語』高橋允昭編訳、法政大学出版局、1989、p．223。

[10] つねに移動する「ゼロ記号」として、この言葉を用いている。「ゼロ」については、 -B-2においてさらに論じられる。

[11] テオドール・アドルノ『否定弁証法』木田元他訳、作品社、1996(1966)、p．26。

[12] ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス』市倉宏祐訳、河出書房新社、1986(1972)、p．213。

## 1．自然／素材とメタフォア
Nature / Material and metaphor

環境との応答は、まず自然の審級で検討される。光や風や水の流れに対して、建築がどのような態度をとりうるのか。光はたとえば健康を促進し、風は快適をもたらし、水は生命を活性化する。現実的にもそうであり、イメージの中でもそうだ。これらはいずれも流れである。生命体は流れのなかに、育まれる。不均質で不可逆な流れが、生命体を生み出し、進化を促した。非平衡状態の生み出す時間が、循環が、そして流れの差異が、リズムが、生命体の存在形式を決定する。静止した均質な平衡状態の中で生命活動は生成しない。建築はその原初的な欲望のありようから言って、生命力の投影であるから、不均質な流れを要求する。
地形も気候も流れである。建築は、流れの遮断あるいは整流を行う装置である。流れは場所の力であり、他者であって、いわば他者に対する抵抗を建築は形成する。
建築にとって普遍的な他者とは自然である。建築はつねに自然という他者との関係、応答を求められてきた。たとえば雨露をしのぐ、という表現があるように、人間が自らの表皮の外側にもう一つの表皮を形成することによって、風雨や暑さ、寒さから身を守る。これが建築のごく素朴な発生形態ではあろう。すなわち自然に対するスクリーンでありフィルターである。スクリーンやフィルターは他者の形態や強度に応じて、さまざまなヴァリエーションを展開した。地球上のさまざまな自然に即応する形で、さまざまな建築的考案は編み出されてきた。たとえば現在も世界各地に展開する集落のなかに人類の知恵を見ることができるだろう。
まちがいなく、自然は建築の母だ。建築は自然の中に、自然に導かれながら、自然を活かし、自然の叡智を引き出しながら、生み出されてきた。しかし同時に自然に抵抗するためにも、その形態を磨き上げてきた。
自然は局所的には建築の素材を提供する環境であり、大局としては、建築にメタフォアを与える風景であった。天蓋は天空を映し、其壇は大地を確実な姿に築いた。見方を変えるなら、人類は天空との間に、そして大地との間に、もうひとつの天空と大地を築いたのだ。フィルターとして、スクリーンとして。剥き出しの荒ぶる自然から自らの生命を守り、そしてそれらと対話するために。
天と地の間に、人間はたまさかの生を受け、大地から得られた素材、石や土や木によって、天空から訪れる他者たち、光、風、雨、等々との関係を媒介しようとした。大地には実りがあふれ、天空からは叡智が降りてきた。ともに災いをもたらしもした。自然との感応を通して見出された形は、長時間かけて磨かれ、形式へと結晶する。建築は、環境との応答を通して鍛えられた、他者に対する抵抗の形式である。他者は抑圧であり、制約であり、拘束であった。しかし同時に、自由への道しるべでもあった[13]。

[13] ＜天と地の対位法＞と名づけた一連の住宅およびそのメタフォアをめぐっては、すでにいくつかの論考を認めているが、たとえば竹山聖「天と地の対位法－どこにも属さない場所」、『新建築住宅特集』Vol.113、1995.9、pp．91-103。

## 2．都市／人間関係の調整
City / Regulator of human relationships

建築はやがて集合し、複合し、高度な交通と交換のシステムの成立とあいまって、都市が生み出された。あるいは集落にも時間が堆積して、変化が刻まれ、それぞれに独特の文化が築かれていった。
人間の居住形態は、政治と経済と社会を生み、その総体が文化と呼ばれる。定住社会が築かれたのがおよそ一万年前、都市が築かれたのがおよそ五千年前。蓄積された時間と文化の変遷は、やがて人類に歴史という意識を目覚めさせる。
建築はそうした文化のなかに、場所を占めるものとして、拠点を定めるものとして、しかもそのもっとも古くからの形式として、思考として、出現したのだろう。寄る辺ないこの地球上に投げ出された人間が、自らの位置を定める基点を求めた気持ちはよく理解できる。不動の自然、たとえば巨大な岩も、そうした基点の役割を担った。人間は人為的にも、そうした不動の点を築こうと試みたのだろう。それらには、今日ではたとえば「聖地」という言葉があてられている。人間がこの世に投錨するポイントである。はじまりの建築は、その祝福の装置だっただろう。

やがて拠点のネットワークが立ち上がり、自然との応答のみでなく、建築相互の、つまり人為的環境との応答が求められるようになった。居住の量と密度が自然との関係を遮断するようになった。
かくして、人間にとって、自然との関係もさることながら、人間相互の関係の調整がより大きな課題となってゆく。一枚の壁は、隔離の装置でもあるが、共に住まうための協調の装置でもある。もし壁がなければ、人間集団は安定した居住環境を形成していくことはできなかっただろう。共同体は価値観を等しくするものであるが、都市は異質の価値観を持つ集団が共に住む場所である。異質の他者が共に住むことのメリットを享受するための場所である。仲が悪いから壁ができるのではない。仲良く共に暮らしていくために、どうしても壁が必要なのである。
異質性を保持しながら、多様な価値の刺激によって生命力を活性化しながら、ときに享楽をもたらす無気味なものにも出会いながら、自由な個人が暮らしていく。都市の建築はこうした人間関係を調整しつつ生活を守っていくための装置であり、ぬきさしならない考案でもあって、この五千年間えんえんと磨き上げられてきたのである。

### 3．地球／標準語と方言
Globe / standardized language and multiple dialects

通信システムや交通手段の飛躍的な発展によって、地球の各地域はいまや密接に結びつけられはじめている。国家を越境する経済のシステムも作動している。
ただし地域の局所的な価値観の差異はかえって際立ってきている。いわゆる南北格差もまたますます増大している。埋蔵されたエネルギーを消費する地域と、そうでない地域に、地球は色分けされている。
世界はますますグローバルな視点から眺められる文明圏となるであろう。しかしそれぞれの地域はますますローカルな文化的特性が守られるようになるだろう。少なくともそのような政策がとられていくことだろう。もともと文明はグローバルなものであり、文化はローカルなものだ。支配的な言語、たとえば英語が実際的なコミュニケーションの道具としてグローバル化し、また各語は重なり合い、融合もするだろうが、局所的な文化を支える言語は保存され、守られていくに違いない。経済はオープン化されても、文化的な境界は保存されるだろう。異質な文化を横断することによってこそ経済は活性化するからである。空間的、時間的な差異から、すなわち世界の不均質さから、商業は価値を生み出していく。さらなる交流の深まりが求められるのは、そのような構図の下においてである。
建築はさまざまな観点から見て、言語と似た面がある。比喩的に言えば、近代建築は、いわば標準語を作ろうとする試みであったといっていいだろう。人間は一人一人違っているが、また別の観点から言えばみな同じである。この、同じというところに視点を定めて、建築を普遍的な形式に還元しようとしたのが、近代建築であった。
ここで近代建築とは、1920年代から1950年にかけての、コルビュジエたちの白い住宅群から、いわゆるインターナショナルスタイルの展開、そしてミースのファンズワース邸にいたる、機能主義に導かれ「均質空間」の獲得に結実する一連の流れをさしている。
それらは、水平、垂直という人類の普遍的な空間認知の枠組みをベースとし、ローカルな文化に根ざした意味の発生を極力押さえるという方法をとった。装飾は方言であるから否定され、形をもつ屋根もまた方言とみなされた。素材もまた地域の特性を表出するものは、却下された。すなわち近代建築運動とは、建築をいわば床・壁・天井という最低限の要素に還元しつつ、万人に共有される形と素材を通して、世界標準語を求める運動だった。
そこには、自然の不均質は人為の均質を通してコントロールされる、という前提があった。不均質は情緒であり、均質は理性であった。意味ではなく均質かつ普遍的な方法が求められた。不均質は均質からの逸脱としてまずは無視すること。このくらいの強さが、新しい形式の提出のために必要であった。
近代建築が折からの機械生産、工業生産という生産手段の改革と合致して一応の成功を収めた後、われわれはいまや地球全体という今日的視点からこれを検証する段階に至っている。振り返って

みれば、地域の言語は標準語によって大きく損なわれもした。標準語が効率を高めた面もあるとはいえ、地球規模での生産の分業も、必ずしも資源消費、循環あるいは再生産にとって合理的なやり方で行われているとは言いがたい。
もちろんもはや建築領域のみで解決される問題ではない。所有や分配の今日の制度自体もまた問われざるをえないだろう。限られた資源や爆発的に増大する人口の問題は、建築的考案の射程を超えている。また、建築的に解決を目指すことが現状追認につながるという逆説もある。資源消費のみに走る生活のスタイル自体も、２１世紀の前半にわれわれが改革しなければならないことのひとつだ。
では建築における課題は何か。資源やエネルギーの問題、人口の増大への対応や、局所的な少子化・高齢化の問題、景観形成の問題、情報テクノロジーのもたらすコミュニケーションの変容に建築空間の果たす役割、技術文化の継承の問題、等々、議論は尽きまい。
ただ、建築が最終的には物理的な存在をベースとすること。人間が身体という物質的存在に根ざしていること。人間圏が地球という物理・生態系の上に展開していること。生命力の活性化とわれわれの生の充実が無関係ではないこと。地球の不均質が流れを生み、生命を育んでいること。すなわち環境の不均質が生命体を強化すること。差異が生の欲動／エロスを作動させること。エロスが人間の意志と欲望を結びつけ、誘導すること。平衡状態を外れた個体にこそ決定論にゆらぎをもたらす自由の可能性があり、また集団全体を活性化する鍵があること。建築は畢竟、生命の燃焼行為であること。にもかかわらず、情報を共有することがますます一般的となるであろうこと。科学技術の発達が新たなブレークスルーを生み出す可能性を有すること。そして建築こそが人類の想像力を磨く最大の媒体のひとつであること。これらを考え合わせれば、建築を設計するという立場からの、地球的視点に根ざす人類社会への貢献にも、おのずと課題が見出されていくことだろう。
標準語への反省は重ねられている。しかしわれわれは標準語の利便性を知ってしまった。しかも標準語があって、方言は際立つ。標準語なしに方言の輝きは自覚されない。方言の輝きを見出し、伝え合うためにも、標準語／理性は磨かれねばならない。ただそれは文化の平準化ではない。標準語で不均質の起伏を均すことではない。世界を平板な風景と化すことではない。
おそらく建築を実践する立場からは、局所に輝きを見出すことの向こうに地球を見通すという視点しかない。人間の身体のスケールを、建築はやはり基本とするからであり、局所の気候を支配するしかないからである。すなわち個別のかなたの普遍という構えしかない。しかも地球は均質でなく、むしろ不均質な全体である。世界は起伏に満ちた風景をもつべきであって、そこにこそ生の欲動／エロスが息衝く。
そのただなかで、相互に開かれ結び合わされつつ多様に展開する人類の未来の社会のありように思いを凝らさねばなるまい。方言に自足することは、新たな形式の可能性に目を閉ざすことである。方言は新たな他者に出会うことによって、自覚され、磨かれ、強化される。政治も経済も社会も、文化を守り育むために存在する。人間は文化を横断しつつ自由を味わうために生きている。存在の驚きと喜びを歌うために生きている。そのための空間を獲得するために生きている。地球上に共に生きる論理と倫理と美を求めている。だから普遍を構想する。おそらく標準語は、新たな輝きに満ちた方言を語り出す行為のすぐそばに寄り添っている。

### Ｃ．他者に対する抵抗の形式
The form of resistance to the Other

*既存のものの力は、意識が突き当たって跳ねかえされるようなファサードを築き上げる。意識はそのファサードを突き破ろうと企てねばならない。*
*テオドール・アドルノ*[14]
*陶酔はニーチェにとって、形式のもっとも明確な勝利である。*
*マルティン・ハイデガー*[15]
*外の思考は抵抗の思考となる。*
*ジル・ドゥルーズ*[16]

[14] テオドール・アドルノ、前掲書、ｐ．25。

[15] ハイデガー『ニーチェ　』ｐ．146。

[16] ジル・ドゥルーズ『フーコー』宇野邦一訳、1987(1986)、p.141。ドゥルーズはこの本で、フーコーに即しつつも自らのイメージする力<知・権力・主体化>の分析を行っている。「主体はそのつど、知を主体化し、権力を折り曲げる襞の方向づけにしたがって、抵抗の焦点として作られるべき」(p.166)であると述べて、主体が空白の場所にあり、他者・外部にさらされてあることを主張している。あたかも<臨床建築学的まなざしのアルケオロジー>の趣である。

## 1. 他者との関係
Relationships with the Other

建築は他者に対する抵抗の形式である。他者とは、建築を訪れる者たちである。現実の審級においても、象徴の審級においても。自然の要素。光、風、雨、雪、あるいは風景。そして時の流れ。あるいは都市的要素。周囲の街並み、歴史・文化的環境。あるいは地球規模の文明論的視点。建築はこれらを導き、これらを映し出し、これらを反射し、これらを刻み込む。導かれ、映し出され、反射し、刻み込まれるべき他者を読み、そして確定すること。それらの流れのさなかを、抗い、そこから現れ出る形式を見出すこと。一枚の壁を、ひとつの窓を、一本の柱を、一枚の屋根を、一枚の床を、それらの関係と配列を、その秩序を、見出すこと。

どれだけ多くの他者を想像し、読み込み、取り込むことができたかによって、生み出される建築の説得力に違いが出る。他者との関係をどう取り結ぶかが建築の基本的な骨格を決定する。どの他者を拒み、また受け入れるか。受け入れるにしても、どのような形で受け入れるか。どの他者を重視し、どの他者を切り捨てるか。他者を切り捨てる作業は、潔さと痛みを伴いつつなされる。ただこの潔さと痛みとが建築に深みを与えてくれる。ためらいや迷いが刻み込まれて、建築に味わいがでる。悩みなき決定は、建築を、ひとたび見れば十分な、読み取るに値しない、退屈なものにしてしまうだろう。

訪れる他者を可能な限り多様な相の下に描き出した後は、それらに優先順位をつける作業が待ちうけている。他者は読み出され、確定され、それらに対する態度を決定された後、優先順位が付される。この優先順位のつけ方が、ほとんど設計という作業の中心的な位置を占める。

設計とは決して形や色を恣意的に操作する作業ではない。建築のありよう、ありうべき姿、方向性を見定め、その形式を、他者の優先順位の設定のなかから見出していく作業である。何をもっとも大切と考えるか。設計者の主体的な決断が問われるのはまさにこの一点においてである。

最終的にはひとつの解を与えなければならないから、めざされるべきは、決断の潔さである。だたその裏側には幾多の試行錯誤が隠されている。建築という行為は、先の見えぬ長い道のりを歩みながらの、ためらいをこめた決断の集積でできている。

## 2. 批評的に環境を形成する
Critical formation of the environment

選び取られた抵抗の形式が、環境に作用をはじめる。この相互の呼吸を見定めつつ、建築行為は全体的な環境を形成していく。

流れを撹乱し、再度秩序づけるわけであるから、新たに形成された環境の変化が、かつての環境を超える価値を持つだろう。生活を豊かに秩序づけるだろう。そこにこめられた世界が、人類の文化の一翼を担うだろう。新しい発見的な空間があって、生命体の活力を高めるだろう。あるいは都市の活力を高めるだろう。未来の世代の夢を育むだろう。

あるいは、既存の環境に否定的な評価を持って設計にあたる場合、全体的な環境の向上のために、あえて批評的なメッセージを発する場合があるかもしれない。防御と反発が表現されるかもしれない。哄笑が満ちるかもしれない。沈黙に身を固めるざるをえないかもしれない。

近隣スケールのコンテクスト／他者でなく、人類文化スケールのコンテクスト／他者に連結されることもあるだろう。調和が停滞に向かうと見て、あえて衝突を意図することもあるだろう。とりわけ今日の日本のように、ほとんどの都市で、依拠すべきコンテクスト／他者が欠落している場合は、未来のコンテクスト／他者を築き上げる意識が求められるだろう。あるいは戦略的に、既存のコンテクスト／他者の蹂躙を図るという方法もありうる。

ただ、建築は人類の文化の系譜に連なる表現であるから、歴史を引き受けるにせよ、切断するにせよ、この文化的コンテクスト／他者を無視することはできない。むろん切断しても、歴史との関わりが断ち切られるわけではない。設計の現場には、過去の時間と未来の時間がいっせいに流れ込んでくるはずである。その時間の密度と射程とは、設計主体の感性と知性のアンテナの精度

に比例する。ただ判断は最終的に歴史の審判にさらされるだろう。それが自覚的な設計の主体が批評的に環境を形成するということである。
生命体は環境を汚染しつつ浄化する。汚染と浄化のスピードも量も、自然圏のサイクルからはるかに逸脱した人間圏にとって、批評はその生存の可否を決定づける態度である。行為の目的をもち、意図を持ってしまった人類は、つねに批評的に環境を形成するという態度をとらざるをえないのであって、その自覚が大きく未来の建築を変容させる。
批評が、精緻に、不均質の織物を織り上げていく。

## 3．流れを誘導する形式／他者＝生と建築＝死
Flow induced by form / The Other = Eros, Architecture = Thanatos

抵抗の形式は流れを生成する[17]。抵抗はたとえば電気回路における抵抗であったり、あるいは流れに掉さす澪つくしをイメージしてもいい。空間はあらかじめ流れを持っている。他者もまた流れだ。流れにさらされて建築は立ちあがる。建築は立ちあがった時点で、流れの真っ只中に立ち尽くすことになる。流れを呼び込み、流れを整流する。新しい流れを生み、空間を生む。建築的エレメントの働きはそのことに尽きる。
とするなら、建築物を訪れ、取り巻き、巻き込み、通り過ぎる他者の流れを感じ取る能力と態度が設計主体の基本的素養である。音楽家の音感に等しい。音感は敏感にエロスのありかを感じ取る。流れに潜むエロスを呼び起こす。抑圧し制約し拘束し、誘導もする他者たちの流れから、エロスの香を嗅ぎ取ること。媒介者／誘惑者を導く形は、抑圧と制約と拘束の裂け目から迸る流れの中に見出すことができるだろう。
建築はものに根ざしているが、あたかも磁石の周囲に磁気力線が生成するように、ものの周囲に作用が生成する。この作用の諸関係によって、建築的出来事は成立している。コンクリートならコンクリートの、鉄なら鉄の、ガラスならガラスの、木なら木の、石なら石の、素材とスケールと形とエッジに応じた作用が生成する。それは感応する空気の震えのようなものであって、音楽でいえば音色のようなものである。とするならスケールは音程のようなものである。プロポーションは調性のようなものである。空間の流れは、建築的エレメントの重奏によってもたらされる。つねに空間の響きに耳を傾けること。媒介者／誘惑者はそこに潜んでいる。
建築はつねに他者とともにある。他者との関係の只中にある。光を受け止め、風をひき入れ、雨を遮り、そして流す。風景を取りまとめ、眺望を取り入れ、星や月に手を差し伸べ、人を導き、動物や植物と会話する。ときに、光や風や水を、自らもささやかにつくり出しもする。
他者の流れの中で、媒介者／誘惑者の乱舞の中で、とどまるもの、それが形式である。流れを、乱舞を、際立たせるもの、流れの中で浮き立つもの、それが形式である。流れの中に見出され、流れに抗い、流れを整え、誘導し、集め、放出する。
建築はついには形式である。とまっている。そのもの自体は動かない。動くものを受けて空間が流れるだけである。そこで息衝くのは選び取られ、加工され、変容を遂げた他者である。媒介者／誘惑者たるエロスである。ただ、他者の訪れを受けて、建築もまた輝き、歌うように思える[18]。建築はしたがって、感応体である。生きて動く他者に感応して、自らの形式が輝き出す。光や風や雨に合わせて、歌いはじめる。生きるものは形式を介して運動を開始する。
生は動き、死は動かない。動く他者と不動の建築。死すべき部分(variable)と不死の部分(constant)。ただ死が生を顕わにする。とするなら、建築は他者という生を誘導する死の形式ではないか。建築家はエロスを介して無意識を誘導する空無としての主体ではないか。生は死に媒介されて、時間と運動をスタートさせる。時間と運動が、流れである。建築は流れを生成する形式であるといっていいのではないか。訪れる他者たちを活性化し、エロスへと変容させる、タナトスの形式であるといっていいのではないか。

[17] 空間を流れと見る視点から、流れ、切断、意味、他者、抵抗、形式、未完結、不連続、方向性、位階性、境界、余白、自由をめぐって素描された論考に、竹山聖「切断の余白に」:『新建築住宅特集』Vol.64、1991．8、pp．39－40がある。

[18] ポール・ヴァレリーが『ユーパリノス』(佐藤昭夫訳、審美文庫)、『エウパリノス』(森田慶一訳、『建築論』東海大学出版会、1978、所収)において建築と音楽の親近性を説き、「歌う建築」への夢を語っていることを想起してもいい。身体を包み込む空間を生み出す芸術として、また「愛されるものが人を動かすように、人を動かさねばならぬ」というこのメガラの建築家の言葉を導き手として、ヴァレリーは建築と音楽の共通性を論じている。ヴァレリーが語っているのはソクラテスの「真」を超え出るエロスについて、である。ソクラテスは肉体を失いながら、あるいは肉体を失ったがゆえに、かえってエロスを恋い慕い、真からエロスの領域への移行を夢想する。